

「シンポジウム」

近代地域史研究者にとっての台湾総督府文書目録編纂の意義

本 康 宏 史

八田與一の「顕彰」

筆者は、長らく石川県を中心とした地域史研究に取り組んできた。一見、台湾史研究とは縁遠いテーマだが、近年、金沢では台湾近代史においてもしばしば言及される、植民地官僚八田與一への関心が高まっている。報告では、そうした風潮の背景や意義について、近年の研究動向をふまえ若干の所感をコメントした。

戦後台湾の政権交代により、日本統治時代の認識は大きく変転した。一言でいえば、植民地台湾に「近代化」をもたらしたものとして肯定的にとらえる傾向にある。その中で、植民地における官僚の「業績」を積極的に評価する語りが生まれている。例えば、石川県金沢出身の土木技師、八田與一を顕彰する動きが、その代表的なものだろう。

八田與一と烏山頭ダム

八田與一は、金沢郊外の農家に生まれ、四高に学んだのち、東京帝大に入学。卒業後、台湾総督府の土木技師に任官した植民地官僚である。かつては、地元でもとくに知られた人物ではなかったが、一九九〇～二〇〇〇年頃、日台の共通認識的な存在に浮上した。

この契機となったのは、台湾の国定教科書「認識台湾 歴史篇」であった。というのも、同教科書に登場する日本人個人名の「唯の二人」が、台湾総督の児玉源太郎と八田與一だったからである。同書では、八田と嘉南大圳の事業が、「台湾近代史における台湾人の主体性を明らかにする」代表的な事例として登場しているのである。このころ日本国内では、「国民的作家」とも言われた司馬遼太郎や、司馬との交友でも知られた台湾総統李登輝らが、「日本人の精神」を体現した人物、台湾の「近代化」や「国際協力」のシンボル、として八田を持ち上げたのである。

日台交流と金沢・石川県

こつした風潮を追い風に、金沢の日台「友好の会」の運動は、しだいに学校教育の分野にも浸透していく。一九八六年には、金沢市教育委員会が、『道徳・郷土資料集』に「郷土の先人」として八田を掲載。二〇〇〇年には、嘉南農田水利会が主催する八田與一逝去五八周年記念式典が、台南市で開催され、金沢市長も出席して盛大に喧伝

された（周年記念としては、あまりキリは良くないが……）。この間、烏山頭ダム近くの「八田與一記念館」の建設も進み、金沢にも八田の胸像が完成している（妻の顕彰も進み、現地には、外代樹の銅像も作られた）。

金沢市を中心とした八田顕彰の動きは、二〇〇〇年代には多様性を帯びるようになる。例えば、小松空港の国際化に伴い、台湾人「観光客」の誘客キャンペーンやIT産業誘致が、石川県の政策として取り組まれている。これに呼応するように、新聞社をはじめとする地元マスコミや経済同友会・青年会議所などの経済団体が、積極的な「親台湾」キャンペーンを展開したのである（具体的には、「ふるさと教育」の推進、「八田技師記念館」へのコミットなど）。

八田「評価」への批判

こうした動向に対して、近年、胎中千鶴や清水美里らによる批判的分析も提示されている。胎中によれば、八田の「物語」の語り手・読み手は、「親日派台湾人」「新台派日本人」であり、近年、一層の広がりを見せるとい¹う。私見によれば、この背景には地域経済活性化の重要な戦略があるものと思われる。端的に言えば、「観光」を軸とした地域振興ということになるが、台湾ロビーから小学生まで含む賛同者の層をみると、「顕彰運動」を推進するさまざまな立場の多様な思想の分析が必要であろう。いずれにせよ、まずは、総督府文書を精査、駆使した「嘉南大圳事業」の実証的研究が不可欠となる。

日台両国における台湾史研究の進展

この間、日台両国における台湾史研究の進展には目覚ましいものがある。この契機として、「公文類纂」等「台湾総督府文書」の保存・公開・目録編纂などの取り組みが背景にあることは言うまでもない。とりわけ、広範な公文書に基づいて、植民地政策や植民地における官僚の研究は一挙に水準を高めている。²⁾ そうした動向を踏まえれば、嘉南大圳事業も、関係者の言説に捉われない実証的研究が必要であろう。これが、嘉南大圳をめぐる八田の業績のより客観的な「評価」の前提になるはずである。³⁾

こうしたなか、近年、嘉南大圳事業をめぐる実証的な研究の蓄積も進んでいる。こうした研究にあつては、例えば、清水美里「日本植民地台湾における「水の支配」と抵抗」などは「嘉南大圳は、利害関係者の「自治」を表面に出しながらも、三年輪作という「水の支配」によって、灌漑区域の農業に変化を強いた⁴⁾とする。清水によれば、同事業に対するマイナス評価は、当ても「嘉南大圳問題」として認識されていたという。植民地台湾における官主導による灌漑の制度化は、農民の反発を引き起こし、農民組合運動等にも発展したのである。いずれにせよ、同事業の分析には、清水も指摘する「帝国の視座」「台湾民衆運動の視座」「農民の視座」という、三つの視座が不可欠であろう。例えば、八田の実績として知られる「三年輪作」は、台湾製糖など財閥系製糖業の保護政策の一環であることは明らかで、「米糖相克」の緩衝地帯として都合の良い方策であったのである。

おわりに 植民地の「近代化」と地域の「グローバル」化

植民地における開発は、近代化と経済的發展をもたらすとともに、帝国と植民地の従属関係を顕在化させ、経済的側面から植民地を支配する装置ともなりうる指摘される。このことは、植民地の在来勢力との葛藤や矛盾を伴い、いわゆる「植民地近代」の問題としてとらえられる。八田與一が手掛けた嘉南大圳事業は、こうした植民地特有の近代性の問題を、「開発」という切り口で考察する格好の事例といえよう。

こうしたなかで、一九九〇年代以降、嘉南大圳の語りは、ダム設計及び工事の監督を担った総督府技師・八田與一の物語の中に封じられ、歴史学の議論とは乖離した「美談」として流布することになった。こうした言説には、しばしば事実の欠落と誇張がみられる。その「物語」では、「不毛の大地」が大規模な灌漑事業によって潤され、農民に「生活の豊かさ」がもたらされたと強調される。さらに、当初は、一部の歴史修正主義と結びついた「語り」として問題視されたものの、近年では、こうした「語り」を前提としたうえで（むしろ、そうした前提を意識する自覚もなく）、さまざまな「顕彰」事業や「交流」が拡大展開されるに至っている。

「八田與一物語」をめぐる記憶の再生・創出という契機は、実は、現代の金沢や石川県を語る価値観や傾向にも共通するものである。そうした点からも、「植民地の記憶」やその表象のあり方を地域の実態に即して検証する作業は、一層今日的な意味を持つように思われてならない。

註

- (1) 胎中千鶴「八田與一」はなぜ語られるのか 植民地台湾の「物語」として」、『東洋史學論集』五号、二〇〇四年（一頁。胎中「八田與一」の「物語」を読み解く。風響社、二〇〇七年。さらに、清水美里の修士論文も、近年の八田與一物語をフィールドワークによる分析から検証している（清水『日本統治下台湾の水利開発 嘉南大圳事業と日月潭水源開発』を中心に、『東京外語大学大学院修士論文、二〇〇八年、のちに、清水美里『帝国日本の「開発」と植民地台湾』台湾の嘉南大圳と日月潭発電所』有志舎、二〇一五年、所収）。以下、本稿は両氏の労作に多くを依拠している。明記し、深く謝意を表したい。
- (2) 中京大学社会科学研究所・台湾文献委員会（のち国史館台湾文献館）監修・編集『台湾総督府文書目録』明治期27巻（二九九四～二〇〇四年）、大正期14巻（二〇〇一～二〇二六年刊行予定）、ゆまに書房、が基礎文献。いわゆる「植民地官僚」に関しては、岡本真希子『植民地官僚の政治史 朝鮮・台湾総督府と帝国日本』三三元社、二〇〇八年などに加え、前掲目録所収の檜山幸夫解説論文参照のこと。
- (3) 先駆的な言及としては、陳文添「八田與一在台経歴和興建嘉南大圳問題」（国際シンポジウム報告）於国史館台湾文献館、民国九十五年八月二十四日～二十五日、参照。
- (4) 清水前掲『日本統治下台湾の水利開発 嘉南大圳事業と日月潭水源開発を中心に』